

カゼ

今週も2分割にてお届けします。
惜しい作品/全作品講評と順位/受賞発表は
「補足資料」にてお楽しみください。

／

「青い風の楽園」

ここは青い風の楽園。

美しい青の世界。

見上げれば軽やかな青。
眼下には深遠な青。

清々しい風が吹く。

風は匂いを運び、恵みをもたらす。
まさに暗黒の空間に浮かぶ楽園と呼べよう。

しかしここには戦争がある。
信念と信念がぶつかり合う。
そしてあたりは血に染まる。
血は血を誘い、連鎖する。

同時にここには花がある。
鮮やかな花弁が風にゆれ、
ほのかな香りがあたりに広がる。

戦争と血と花。

この全てが存在する青い風の楽園。
私がいるべき場所である。

HSN1 パンデミック タミフル

あなたはこれらのキーワードを覚えているだろうか？ H5N1・パンデミック・タミフル、これらは鳥インフルエンザという言葉でつながり合わせることができる。とはいえパンデミックという言葉は聞きなれないという方もいるだろうからまずはその代表例のスペイン風邪からはじめよう。

パンデミックを引き起こしたスペイン風邪はご存知のとおり1918年に世界で大流行したインフルエンザである。このインフルエンザは系統学的にいうとH1N1鳥ウイルス型の祖先にあたる。始めヨーロッパと北米大陸で感染し後に太平洋の孤島を含む全世界へと拡大した。世界人口の1/3が感染したと考えられており、およそ4000～5000万人が死亡、死亡率は25～50%とわれている。これがパンデミックである。

1918年に生まれてこなくて良かった、あなたはそう思ったことであろう。ではその思いを崩しにかかろう。スペイン風邪のウイルスは実験室において既に復元されており、少し前に騒がれていたH5N1型鳥インフルエンザと比較することができると言われている。感染能力から見ても、実験データによるとスペイン風邪のウイルスは1000回でマウスに感染することができる。一方H5N1型の病原性が高いものは10～15回でマウスに感染できる。次に致死率を見てみよう。スペイン風邪ウイルスの致死率は先ほど述べたように25～50%である。他方、H5N1型では現在10%を超えている。次は宿主であるワトリでの組織親和性を見てみよう。スペイン風邪ウイルスはH1N1型に属しており、呼吸器及び腸管に感染するが、H5N1型においては脳を含むほぼ全ての組織に感染することができると言われている。なおH5N1型においては、既に人間の肺、腸、脳などに感染したと思われる症例がある。

いかがだろうか？それでもまだスペイン風邪の方が怖いとお思いになるだろうか？もしあなたがそう思うならきつと「今なら当時にはなかった治療法・予防法がある」と考えているからだろう。そのような甘い考えは捨てるべきである。次は治療法・予防法及び昔はなかったその他のリスクについて述べてみよう。

まず治療法についてだが、確かにタミフルなどの抗ウイルス薬は存在する。しかしあるシミュレーションによるとインフルエンザの封じ込めに必要な量は3000万人分であり、3年前に日本が確保できた量は1420万人分にすぎない(1420万人分は世界流通量の薬半分に相当する)。次に予防法について考えてみよう。予防法として有力なのはワクチンである。しかしこのワクチンもH5N1型が主型の現在では古いウイルス株を頼るしかない。またパンデミックは第一波、第二波……と来るのだが、一番流行の激しい第一波にはどうしても間に合わない(ワクチン作成には最短でも6ヶ月かかる)。現在ウイルス研究者が薦めているのは手洗いとマスクの着用だ。次はその他のリスクについて考えてみよう。スペイン風邪が流行った当時にくらべ現在では交通手段が発達し、ウイルスの伝播速度は比べ物にならないほど速くなっている。つまり、同時に世界中で感染が起る可能性がある。スペイン風邪では命を落とした人の多くが20～30代の健康な人だった。これはスペイン風邪ウイルスにインターフェロン放出といった初期免疫応答を抑制し、サイトカインストームという免疫過剰反応を引き起こさせる機能があつたからだ。つまり免疫力が強い若い人のほうが命を落としたということである。H5N1でもこのような機能を確認した例がある。

今まで新型鳥インフルエンザの怖さについて述べてきたが実感していただけただろうか？普通ならば最後に希望的な事柄を述べて終わるところだろうが、より印象を強くするために最後にある事実を提示して新型インフルエンザについての締めとしたい。

パンデミックを起こす可能性があるのはH5N1型だけではない。H5N1と同じ高病原性に分類されるH7N7ファミリーにもその危険性がある。また世界各地でたびたび流行が確認され、既に人にも感染が確認されているH9N2型はパンデミックの危険ウイルスリストの上位に入っている。

ドクター喜多川の『病院へ行こう!』 第三回テーマ『かぜ』

ぶえつくしよい。ずずず……。——あ、失礼しました。こんにちは、ドクター喜多川です。どうやらかぜを引いてしまったようです。自分は大丈夫だろうと高をくくって、うがいを徹底しなかったためだと思われます。医者の不養生とはよく言ったものですね。

さて、今回はそんな「最も身近な病気」とも言われる、『かぜ』について書きたいと思います。しかし、『かぜ』と一口に言うものの、その症状には様々なタイプがありますよね。せき・鼻つまり・のどの痛み・発熱……などで同じ『かぜ』という病気なのに、こんなにも多様なタイプの症状があるのだろう、と不思議に思う方もいらっしゃるでしょう。無理ありません。実は、『かぜ』という名前の病気はないんですから。

——すいません、ちよつと大げさに言いすぎました。みなさんが『かぜ』と呼んでいる病気、これは一つの病気を指すのではなく、医学的には、急性鼻咽頭炎・急性喉頭炎・咽頭結膜熱などを総称して『かぜ症候群』と呼ばれるもののなのです。ものすごく簡単に言えば、のどが痛くなったり、鼻がつまったり、熱が出たりしたら、だいたい『かぜ』と呼ぼうぜ、と言うだけのこと。その他の病気のように、原因となるウイルスや細菌などが数種類に絞られず、なんと二百種類以上もの病原菌が確認されています。かぜの予防接種が無いのはこのためです。病原菌が多すぎて、一つ一つ対応するワクチンが作れないわけですね。

では、かぜを引いてしまったらどうすればいいのでしょうか。もちろん、医者の立場としてはすぐに病院へ行かれることをおススメしますが、今日はあえて有効な民間療法をお教えします。

①ねぎマフラ

ねぎに含まれる『硫化アリル』という成分には、のどの痛み・腫れ・発熱を和らげる効果があります。これを利用したのがねぎマフラ。有名なだけあって効果は抜群です。

作り方ですが、ねぎの白い部分を十センチほどの長さに切ったものを三本用意し、縦に裂いて火で炙ります。しんなりしたら、清潔なガーゼなどに包んでのどに巻きつけるだけ。よく生で巻く方がいますが、焼いてからのほうが効果は高いです。是非お試しください。

②だいこんアメ

のどの腫れは、粘膜の炎症によるものです。大根に含まれる三種の酵素が喉の炎症を抑え、また、皮に多く含まれるビタミンCがコラーゲンを生成し、新しい粘膜を作り出します。はちみつにも殺菌・消炎があり、まさにだいこんアメは、のどの腫れにはうってつけと言えるでしょう。のどを酷使する落語家さんにも愛用されている方がいらっしゃるようです。

作り方ですが、これまた簡単です。皮ごと二センチほどの角切りにした大根をビンなどの容器に入れ、ひたひたになるまで蜂蜜を注ぎます。一晚置いた後、上澄みをお湯に溶かして飲んでください。

かぜといえば、十一月も終わりに差し掛かりまして、そろそろインフルエンザの季節となります。みなさんはもうワクチン接種はお済みですか。ワクチンを接種することで、感染をある程度予防することができ、また感染してしまった場合にも、症状の発生を和らげることができます。ワクチンは地域の医療機関で簡単に接種できますが、予約が必要となる場合もありますので、電話などで問い合わせるからの訪院をおススメします。

『たかが、かぜ』と軽く見るのは危険です。かぜの合併症で、毎年多くの方が命を落とされています。かぜは万病のもと。日頃から、かぜを引かないように体調管理を心がけたいものです。私も今日はだいこんアメを飲み、ねぎマフラをして、早めに寝たいと思います。

ぶえつくしよい。ぶえつくしよい。——ずずず……。■

風に吹かれて

右手におにぎり、左手に地図を持って、僕は木陰で休んでいた。もう秋も中盤、木々も色づき始めているというのに、僕は大汗をかいていた。家を出発してから2時間、僕はひたすら自転車をこぎ続けてここまでできたのだ。

おにぎりを口の中に入れ、片手で持っていた地図を大きく広げる。進路が一つしかないことを確かめて、僕はその道に目をやった。見えたものは、長く続く山道。ここを越えれば、目的地に着くことができる。その思いで、僕は心のなかの弱気を封殺して、前進を決めた。

自転車のギアを確認して出発。こぎはじめと同時に向かい風を感じる。これは出発してからずっと、感じてきたものだ。しかしここは山道。その傾斜が、向かい風をより強力なものへと変貌させ、僕の足を重くする。最初は重く設定していたギアも、だんだんと軽くなっていった。ギアを軽くすることで、足の回転は楽になるが、スピードはなかなか出なくなってしまう。そして軽くしたギアでもペダルが動かなくなってくる。こうなると、ただの悪循環だった。

ギアが一番軽いものになってから暫くして。僕は遂に自転車から降りてしまった。その場にへたりこんで地図を確認する。しかし目の前には真っ直ぐに伸びた山道しか見えなくて、地図上のどの辺りにいるのかすらわからなかった。もう帰ろうか。そんな思いが頭をよぎってきた。

でも、僕は再び自転車をこぎだした。少しずつしか進めないけど。何回も自転車から降りて、助走をつけたりはするけど。足の疲労と戦いながら。向かい風と戦いながら。僕は前進をやめなかった。ここで帰ってしまえば、身体は楽だが、後悔だけが残ることがわかっていた。

それからまた時間がたって。突然、傾斜が緩くなった。山道の最高点に、到達したのだ。辛かったが、登りきれた。やればできるんだ。やめなくて良かった。そしてその感動もそこそこに、僕は一気に先へ進むことにした。あとは降りだけ。

一刻も早く、目的地に到着しよう。この風を感じながら。

……そして更に数時間後……

「おまいら、良く聞け！」

「イエッサー！」

「おまいらも気付いているかも知れんが、俺たちが生きて行くにはここはもう狭すぎる。よって、新境地を開発するぞ！」

「イエッサー！」

……翌日……

「よし、侵入成功だ！ 各班作業に取りかかれ！」

「イエッサー！」

……更に数時間後……

「隊長！」

「何だ？ 何か問題でも起きたか？」

「はい、隊長！ 気温が上昇傾向です！」

「隊長！」

「今度は何だ！」

「第三班との連絡が途絶えました！」

「何？ 詳しく説……」

「隊長！ 第二班も連絡がつきません！」

「これは不味い……抵抗が予想以上に強い。」

よし！ 全軍集合しろ！ 一気に攻め入るぞ！

「イエッサー！」

「隊長！」

「何だ！」

「隊長！ 偵察班に寄ると、多数のY字が接近中とのことですよ！」

「隊長！ 接近中ではなく、すでに交戦中です！」

「隊長！ 前線からの情報に寄りますと、Y字に触れられるとくっついて動けなくなるそうです！」

「ええい、おまいら！ いつもの実力はどこへ行った！ さっさと片付けてしまえ！」

「隊長！ 前線からの報告では巨大なスライムも大量に現れ、兵を飲み込んでいます！」

「隊長！ 外気温がもうすぐで我々の活動可能温度を上回ります！」

「隊長！ 兵が次々に活動停止に追いやられて……」

「おま……い……ら……」

……次の日の朝……

「お母さん。熱下がった！ 遊びに行ってもいい？」

「熱計ってからにしない？」

「はい！」

「コホン……私、風邪引いてるから。」

そう言つて舞はキスを拒んだ。俺がアメリカへ飛び立つ前の日、これが俺と舞が交わした最後の言葉だった。

俺は翌日、ドイツへと旅立つた。

俺は四年制の大学に通う学生。そして、舞は去年短大を卒業して都内の商社に勤め始めたOL。俺達が付き合い始めたのは高校三年生の時だった。

留学生活を始めてからは舞と手紙のやりとりをしていた。ドイツでの生活、お互いにあった出来事などなど。俺は舞を心から愛していたし、舞も俺を愛してくれていると信じていた。

しばらくすると、舞からの手紙は途絶えてしまった。暇を見つけては舞に電話をしたが、いつも留守番電話の応答ばかりだった。

不安になつて舞の勤め先に電話したこともあった。その時、電話に出たのは智子だった。智子は高校の頃からの舞の親友で、今は舞と同じ商社に勤めていた。

「ごめんなさい、聡くん。今、舞のことはそつとしておいてあげて。私にはそれしか言えないの。」

俺は一年間の留学から帰国した。すぐに舞に会おうと思つて、空港の公衆電話から舞のケータイに電話した。

「……この番号は現在使われておりません」

それから一ヶ月がたった頃、智子から電話が来た。

「あのね、ちよつと話があるの。」

ある喫茶店で智子と待ち合わせた。智子は席に座るなり、白い封筒をバッグから取り出して俺に渡した。

それは舞が俺に宛てた手紙だった。

「聡、ごめん。ずつと黙ってたけど、私、白血病なの。一緒にいてくれて楽しかった。でも、もう会えなくなつてしまった。本当にごめんなさい。」

智子は言った。

「舞はずつと聡くんのことを心配していたわ。喋れなくなつてからも、最期まで……ずつと。」

手紙の最後にはこう書いてあった。

「最後に聡に魔法をかけます。聡が私のことを忘れる魔法を。」

——でもね、舞。この魔法が効くことはないよ、絶対。——

"Don't Leave Me Alone, please."

三日前、風の強い日の夜に、水野先輩は自殺した。

通っていた高校の屋上から飛び降り自殺——正確な死亡時刻は分からないが、目撃証言が無いこと、遺体の脇に鍵が落ちていたことから、恐らく人のいない深夜だろうと推定された。遺体は翌朝登校した教頭が発見し、すぐに警察に連絡、生徒の見ないうちにさつさと回収された。が、その日のうちに学校中に噂が流れ、私も遺体は『顔は形が分からないくらいに変形し、辺りには脳が飛散していた』という話を友達づてに聞いた。遺書は見つかっていないため、最初は事件性も疑われたが、物的証拠が無く、また本人の周りにトラブルがあった形跡も「何一つ」なかったため、結局は自殺という形に落ち着いたようだ。

でも、私は、本当のことを言うと、事件であつて欲しい、と思った。先輩は「何か私の及びのつかないモノに殺された」と。それが交際相手だろうが、狂った殺人鬼だろうが、その方がよほど納得がいった。だけど現実はそのようなシナリオは用意せず、先輩は、何一つ残さずただ死んだ。謎は謎のまま放置され、解決する名探偵も、自白する犯人も不在のまま、残された登場人物は何も出来ずに右往左往しているだけだった。

だから今、私は先輩が飛び降りた、この場所に立っている。ここから私も飛び降りれば、先輩が死んだ理由が、少しは分かるんじゃないか、そう思ったから。

柵を乗り越え、外の段差に足をかけた。冷たい風を感じながら、ひと、ひと、と一歩ずつ崖下に進む。あと数センチ踏み出せば、先輩の下に行ける。そう思つて、そつと、足下を見た。

——怖かった。あとおんの数センチ進めば死ねる、という事実が、その距離を無限に遠ざけた。途端にがくがくと足が震えてきた。もはや立つこともままならず、私はその場にしがみ込んでしまった。

◆
——".....leave me alone."

私は屋上の片隅に座り込み、先輩がよく口ずさんでいた歌の一節を思い出して、そつと呟いた。

「私を一人にして、か……」

——置いていかれた人の身にもなれよ。
私はそのとき初めてそう思った。

◆
ふと、暗闇の中、屋上のドアから人影が現れるのを見た。人影は脇目もふらず、一直線に、先輩が飛び降りた近くの柵に向かい、あつさりとそれ乗り越えた。そして、段差に乗ると、何かを決心したようにうなずき、そのまま飛び降——

「待つて」

私はその人の袖をぎゅつと掴んだ——男の子。

「は、離してくださいっ！行かせてくださいっ！」

「そんなコトしても、先輩のトコロには行けないよ！」

——なんで、そんなことを言つたのか、自分でも分からない。我ながら、傲慢だと思つた。ついさっき、私も彼と同じように自殺しようとして、やめた。彼が同じことをしても、止める権利は私には無いはずだ。越えられなかった私と、あつさり超えられる彼、何が違うのだろう。死にたい、それで気持ちが晴れるのであれば、そのまま死なせてあげるべきじゃないか？
しかし、私の中の何かがそれをさせなかった。

「先輩……僕は先輩のこと、ずっと好きでした！あの優しい先輩が……それなのに、理由も分からず死んで！聞きたいんですよ！何で……何で僕を置いていつたのか！」

彼は必死に抵抗する。

それでも、私は彼を離さなかった。いや、離せなかった。

私は、うつむきながら、必死で答えを探した。

「離してくださいっ！離してくださいっ！」

彼は涙声で叫んだ。私は、そんな彼を、後ろから抱きとめた。

「もう誰も、私の前で死なないで……私を置いていかないでよ……」

——それが、本心から出た答えだった。

先輩は、もう、いない。しかし、先輩が死んだことで心を痛める人間を、これ以上失いたくはない。

エゴかもしれないけど、それが答えだった。

「置いていかないでよ……」

気が付いたら、涙が溢れて止まらなかった。

それは、先輩が死んでから流した、初めての涙だった。

彼は抵抗を止めた。さっきまでの勢いが嘘のように、全身の力が抜け、弱々しく呟いた。

「先輩……僕は、どうすればいいんですか……」

二人でその場に崩れ落ち、声を上げて泣きじやくつた。

死んだ方がましだと思うくらい、いつまでも泣いていた。

風で俺のパンツが飛ばされた。

風で俺のパンツが飛ばされた。

ベランダに干してあったパンツが飛ばされた。

そういえば今日は朝から強風注意報が出ていたつけ。

俺は途方にくれた。

パンツは、干していた一枚しか持っていなかった。

それは昨日、重要書類を処分していたとき。

書類の間に挟まれていた洗濯済みのパンツ。

それを誤って一緒に、すべてシュレッダーにかけてしまった。

電動シュレッダーは無慈悲に俺のパンツを食いつぶした。

余儀なく俺は、昨夜からノーパンで部屋の中で過ごすこととなった。

現在、非常にまずい状況。

このままでは午後に開かれる重役会議に遅れてしまう。

こう見えても俺は天下の八本木ヒルズに住む、世間から注目のIT会社社長。

午前中はとりあえずパンツを干すために会社を休んでいた。

ノーパンで仕事に向かうわけにはいかない。

だから、とりあえず部下には風邪だと嘘のメールを送った。

本当のことを言ったら、会社が潰れるかもわからない。

さあ困った、困ったぞ。

パンツを買いにノーパンで、外をうろうろするのも危険だろう。

あとは、親切な誰かさんが、俺のパンツを拾って届けてくれることを待つのみだ。

だが、そんな奇蹟なんて起こるのか？

♪ピンポン

モニター画面に、先月結婚を約束したばかりの俺の彼女が映る。奇蹟は起こった。

「あんたのパンツ、表の通りに落ちてたわよ」

「まじサンキュー！君は命の恩人だ。それにしてもよく俺のパンツがわかったね」

「くまさんの刺繍入りブリーフなんて、あんた以外に穿く人いないわよ」

これが最後、と眼下の港を見下ろすと港内には沈みかけた軍艦が数隻停泊しているのが見えた。

往時には数十隻の船舶で賑っていた光景がまるで嘘のようである。

これが、今のこの国の現状なのだ。

今、私は特攻隊の一機として敵艦隊へ向かっている。

恐怖や躊躇いはない。

去年の春、海軍の航空兵として徴兵された時から覚悟はできていた筈である。

急に口の中が渴いてきた。

本来操縦席の中は禁煙であるが、最期位いいだろう。

懷に手を入れかけ、止めた。

煙草の配給は五日前から止まったままなのだった。

気が付くと敵艦隊の位置まで、私の人生最後の飛行が終わるまで後わずかなところまで来ていた。

そう、私の人生はまもなく終わる。

爆弾を抱えたまま敵艦に体当たりし、多くの敵を巻き添えにして。

別に誰かに強制されたわけじゃない。

両親も兄弟も親類も、皆空襲で焼かれてしまった。

徴兵されてから毎週手紙を書いてくれた愛しいあの娘も先月の空爆で写真だけの存在になってしまった。

国のためなんかじゃない。

私は家族やあの娘のように、戦争とは全く関係がない所にいた筈なのに無慈悲に殺されてしまう人々を、そしてそれで悲しみに暮れる人々を少しでも減らすためにこの特別攻撃に志願した。

狙うは空母、あの娘を殺した艦載機のみ

その時、隊長機から通信が入った。

テキクウボカンタイハッケン

私はポケットに入れた写真の存在を確かめ、操縦桿を握る手に力を込めた。

そして、戦闘が始まった

片翼が炎に包まれ、失速しそうになる機体を私は必死に操作した。

上空から見た時は豆粒のようだった空母の艦体が視界に広がっていく。

甲板に突入する瞬間、機銃を撃つ敵の水兵と目が合った。

青い、無垢な目をした同じく、らしい歳の青年だった。

眼前を数百隻の船が群れを成して進んでいく。

さすがに見慣れたとはいえ、海を埋め尽くす程の数の船が波を蹴立てて進撃する様は見る者を圧倒する迫力がある。

オキナワでの戦闘も峠を越えたと聞き、いよいよもって長く続いたこの戦争も終わりが近いと実感する。

持ち場である空母の対空機関銃座にもたれかかりながら、柄にもなく考え事をしてしまう。

戦争が終われば、故郷のテキサスの大学に戻って勉学を再開することができる。

徴兵されてから全く勉強というものをしていないので講義についているか若干不安はあるが、今はとにかく家族や彼女が待っている故郷に帰りたいかった。

一服したくなったので懷に手を伸ばしかけたが、すぐに手を引いた。

今は禁煙中だった。

空母の甲板から轟音を響かせながら次々と爆撃機が発艦していく、今日の本土空爆の第3次攻撃部隊だ。

日本の民間の施設や家屋を攻撃するというのはあまり気の乗る話ではないが、それでこの戦争が一日でも早く終わるのならそれも仕方ないと思った。

オキナワの戦いが始まった当初の日本機の激しい攻撃は思い出しただけでぞつとする。

爆弾を抱いての体当たり攻撃、カミカゼ

その狂気の攻撃のため多くの戦友が死ぬか、若しくは恐怖のあまり発狂して戦場を去った。

あんな真似を平然と実行する日本人が全く理解できなかった。

きつと日本兵は狂った自殺願望者の集団に違いない。

俺は一刻も早くこんな恐ろしい戦場をおさらばして故郷に帰りたい。

故郷の彼女の写真を見つめながら、切実にそう思った。

その時、最も聞きたくないサイレンの音が聞こえた。

空襲警報だ

そして、戦闘が始まった

そのカミカゼは左翼が火を吹き、更に撃たれてもまだ落ちなかった。まるで艦から糸で引かれているかの様に真っ直ぐ突っ込んできた。

そしてそいつが甲板に命中する瞬間、俺はそのパイロットと目が合った。黒い、狂気など感じとれない純粋な目をした同い歳位の奴だった。

僕はどこに行ってしまったんだ？

さつきからここを歩き回っている存在は

まるで浮いているような感覚

目を開けば

歩いているのかも怪しいほどに

僕が僕じゃないような気がして

僕はここにいる

僕の通るところに風が吹く

泣いてくれてありがとう

だれどごめんね

決して救われはしない

予定より少し早く終わったんだ

「僕」が

大したことじゃない

大したことじゃないんだけど

ただ君の顔が見たくて

その槌が振り下ろされるまでに

君にこの風を、「僕」を感じて欲しくて

Anyway The Wind Blows...